

奈須田 敬 『統幕議長が総理に呼ばれるとき』 原書房 1980年

が世界の平和に建設的な発展であるとの評価で同意した」と語った。これに対し、キャラハン（英）、シュミット（独）両首相は「ソ連とのデタントは、欧州にとって最も重要だ」と強調して、米国の世界戦略が、ソ連を刺激しないようけん制したという。その点はカーター大統領も十分心得ているはずだ。しかし、英国もハリヤー（垂直離着陸ジェット戦闘機）の対中輸出をひっこめる気遣いは毛頭ない。二十三日、わが政府筋は、中国軍五個師団が中越国境に集結中であることを明らかにした。二十九日、鄧氏の訪米を横目に見ながら、防衛庁首脳は「捉捉、国後両島に戦車、大口徑砲、地对空ミサイルを伴う計数千人のソ連地上軍が六〇年以來十九年ぶりに配備された」と発表したが、従来にみられない「重み」が感じられた。米国からの帰途、鄧氏は再来日（二月六日）するが、おそらく右の防衛庁発表と「連動」しないはずがない。かくして一九七九年一月はまさにパワー・ポリティックスを絵にしたような、不気味な予兆をほらんだ激動の月であった。そしてその台風の目は中国であり、鄧小平副首相その人である、といっているだろう。

『中ソ対立と現代』の「興奮」

鄧副首相訪米の報道に気をとめながら、東京外語大教授中嶋嶺雄氏の近著『中ソ対立と現代』（中央公論社刊）を一気に読了した。

「ヤルタ体制の形成から五〇年代後半の秘められた中ソ決裂にいたる時期の中ソ関係は、その「正史」と「裏面史」のパラドックスという点においても、現代史におけるもつとも刺激的な国際関係であった。やがて中ソ関係は周知のように、一九六〇年以降の中ソ論争の公然化から一九六三年夏の中ソ両党会谈決裂による中ソ対立へ、次いで六九年春と夏の中ソ軍事衝突へと発展し、さらに七〇年代に入るや、他方における米中接近の到来に比して、まさに中ソ冷戦とも見做し得るグローバルな国際政治上の抗争となつて今日にいたっている」と、「終章・中ソ対立の神話」の冒頭に、著者は明快に解説しているが、その中ソ関係の「正史」と「裏面史」のパラドックスにメスを入れたのが本書である。

一九四五年二月のヤルタ会議におけるソ連の対日参戦密約と、その代償としての極東における領土・権益の収奪政策こそが、そもそもの中ソ対立の原点であり、四九年十二月から五〇年二月にかけて、モスクワで行われたスターリン・毛沢東（および周恩来）の会談は「激しい駆け引き、意見の不一致、脅迫、論争、一方的主張、それへの反発」そのものであり、「スターリンは対話の途中で激怒し、毛沢東との話し合いを半月もストップした」とも伝えられる。まさに「世紀の大交渉」であったといわれる。

さらに朝鮮戦争に対する中国の不満と参戦の動機や、高崗粛清事件と東北（満州）をめぐる中ソ関係の分析も実に興味深い。

そして興味を中心はなんといっても、毛沢東（および周恩来）の強烈なナショナリズムと自負心と駆け引きであろうか。しかし、本書ではさりとて触れているだけだが、スターリンとの交渉行き詰りに業を煮やした毛沢東が急拠周恩来を呼び寄せて交渉に当らせた一幕の中にこそ、「剛」の毛、「柔」の周の名コンビがあったのではないか。中ソ友好同盟条約は、毛・周にとっては、むしろ「屈辱的」条約であったのかもしれない。

『奈須田敬』統幕議長が総理に呼ばれるとき-1980